

毛詩唐風平安中期点における經典釈文の利用

——声点・点発を通して——

原 卓 志

平安時代における漢籍の学習・訓読に際して、種々の註釈書が利用されていたことは、先学の御研究によって、その具体的な様相が明らかにされてきた。それらは、本文に書入れられた音注や義注・字体注が各々の註釈書によっているという観点で論ぜられ、更に訓読における字訓が註釈書の義注によるという研究である。

これら書入注や字訓の他に、古文尚書平安中期点を取上げて、本文・割注部に施された朱声点・朱点発が經典釈文と密接な関係を有するであろうことを私に論じたことがある。今、簡単に古文尚書平安中期点における朱声点・朱点発と經典釈文との関係を述べておくならば、朱声点は唐鈔本系經典釈文と同体裁である原初形經典釈文の音注に即して差声されたものであり、本文左傍に施された、双点・三点の点発は經典釈文に記載された本文の異同を含めた字体注と密接な関係を有し、双点と三点との差異は經典釈文の注記中に記載された字体注の数に関係があるのではないかと考えられたのである。このように、經典釈文と密接な関係を有する声点・点発が存在することによって、古文尚書の学習における經典釈文の利用の一端が

知られるのである。

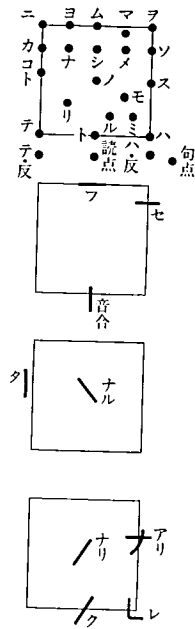
しかし、前稿においては古文尚書平安中期点に見られるような經典釈文と密接な関係を有する声点・点発が他の資料に認められるのか否かという問題が残されたままとなった。特に点発の如き機能を有する符号が他の資料にも認められるのかどうかという問題は非常に興味あるところである。

本稿では右述の如き観点から、平安中期の漢籍訓点資料の中より毛詩唐風殘卷を取上げ、經典釈文利用の様子を考察してみたいと思う。なお、本資料の声点・点発が經典釈文と関係を有するという指摘は、夙に石塚晴通氏によってなされている。本稿の意図することと重複する点が少なからず存在するが、なお詳細に検討し、古文尚書平安中期点の場合と比較することによって新たに考えられる点等述べてみたいと思う。

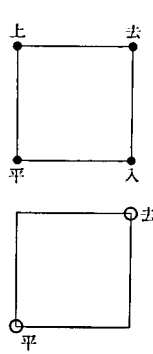
二

毛詩唐風平安中期点は「蟋蟀」以下「鶉羽」までの僅か百十三行の殘卷であるが、全卷にわたって朱筆の仮名・ヲコト点・声点と極く少数の墨点、更に角筆の仮名・ヲコト点・声点が施されており、

国語史上重要な文献であり複製本が公刊されている。⁽⁵⁾
朱筆のヲコト点は次のように帰納される。⁽⁶⁾



声点は次に掲げるように星点が四隅に施される他、圈点で差声される場合がある。



声点として星点とともに圈点がいられるのは古文尚書平安中期中点にも見られる。この星点と圈点の二種には今のところ相違が認められないため、便宜的に同一の声点として取扱うことにする。なお、星点の声点とヲコト点の「て」「に」「を」「は」との区別は、声点はやや大ぶりであるのに対してヲコト点が小ぶりであることよって理解し得るが、複製本では微妙で区別し切れない箇所も多い。このため、声点の認定に当って全文を朱点に従って訓読するという方針を立て、挙例に際しては煩雑にはなるが前後のヲコト点をも掲げるようにする。

毛詩唐風平安中期中点を朱点に従って訓読すると、例えば次のようになる(冒頭部一オ2より一オ5まで)。

「蟋蟀(ハ)晉の僖(キ)公(ヲ)刺(ル)〔也〕」 儉に(シ)て礼に・中(マ)ラ)不。故(ニ)是の「詩(シ)を(作)リ)て以て(閑)ふ〔之〕。其(レ)時(ニ)及(ヒ)て礼(レ)を以て自(ラ)虞(ル)樂(ル)を(欲)ス)〔也〕」「此れ晉なり〔也〕」 而を之を唐(ニ)と謂ふことは本(レ)は其(ノ)風俗を・憂(ル)深(ク)・思(モ)一遠(ク)・儉に(シテ)〔而〕礼(ヲ)用(キ)ル)〔也〕。乃(チ)堯(ノ)〔之〕遺(ル)風(ヲ)有(リ)このうち声点は「僖(平声)」「中(去声)」「樂(入声)」「思(去声)」「の四字に差されており、本文左傍に施される点発が「僖」字に認められる。古文尚書平安中期中点に見られる点発は次のように双点と三点とであり、単点はないが、毛詩唐風平安中期中点では総て単点である。

○江沱潜 漢 (九条本・一オ2)

○爲(レ)僕 (岩崎本・二七九)

…准 (岩崎本・一一)

さて、本資料に施された声点・点発が古文尚書平安中期中点と同じように経典釈文と関係有するか否かについて、石塚氏の御指摘の確認をも含めて、右の訓読文に対応する部分を通志堂本毛詩釈文より引用すると、次掲のように、冒頭欠けて不明である「蟋蟀」を除いて毛詩釈文に記載される総てに声点・点発が施されていること

が理解される。

○蟋蟀〔上音悉下所律反蟋蟀也説文蟋蟀作𧈧〕

○僖公〔許其反史記作釐侯〕

○不中〔丁仲反〕

○虞樂〔音洛下皆同〕

○思遠〔息嗣反注同〕

すなわち、毛詩唐風平安中期点の声点・点発も古文尚書平安中期点の声点・点発と同様に經典積文と關係を有するものであらうと予測されるのである。

次に本資料における声点・点発の有無と經典積文（毛詩積文）掲出の有無との關係を調べると次のようになる。

(A) 經典積文に掲出され、声点・点発が施されるもの

一三八例（八五・七％）

(B) 經典積文に掲出されず、声点・点発が施されるもの

四例（二・五％）

(C) 經典積文に掲出され、声点・点発が施されないもの

一九例（一一・八％）

この關係を古文尚書平安中期点の場合で見ると次のようになる。

(A) 經典積文に掲出され、声点・点発が施されるもの

一三三九例（五八・一％）

(B) 經典積文に掲出されず、声点・点発が施されるもの

七八〇例（三三・九％）

(C) 經典積文に掲出され、声点・点発が施されないもの

一八四例（八・〇％）

毛詩唐風平安中期点も古文尚書平安中期点と同じく、經典積文に

掲出されず、声点・点発が施される(B)類と、經典積文に掲出され、声点・点発が施されない(C)類とが存する。

(B)類は次に掲げる四例である。

○・荒(き大也) (一ウ5注)

○愉に讀は日愉(と)。(三オ2注)

○將(に)。(爲(ま)沃(か)。(六オ7))

○怙(と)恃(と)也。(八オ7注)

このうち「愉(平声)」では、毛詩積文に「是愉〔毛以朱反樂也鄭作偷他侯反取也〕」とあり、対応する注記があるとも考えられる。

これら(B)類について、現在毛詩積文の唐鈔本系・宋刊本系の各本を比較し得ないため俄かに断言することはできないが、原初形經典積文に存した条が通志堂本經典積文において削除されたものであるか。但し、本資料に書入れられた音注が反切形を異にするものを含みながらも総て通志堂本經典積文に見出せること(10)から、削除の具体例を示すことは困難である。

(C)類は次に掲げるものである。上段に毛詩唐風平安中期点の用例を下段に經典積文の例を掲げる(以下同)。

禮樂之外也 (二オ1注)
良士の休(た)カコト(せ)セ (二オ6)
陽(に)有(有)楡 (二ウ6)
栲(は)山(栲)也〔書入注・勅書反又他胡反〕 (三オ2注)
楛(と)櫜(也)〔書入注・於力反〕 (三オ2注)

禮樂之外〔此一樂字音岳〕
休休〔許虵反樂道之心〕
有(有)楡〔以朱反〕
山(栲)〔勅書反又他胡反〕
楛(と)櫜(也)〔於力反〕

弗鼓弗考 (三才4)

山上有漆。〔書入注・音七〕

(三才5)

以て封す沃を。〔書入注・烏毒反〕

(三ウ3)

激揚之水、〔書入注・經歷反〕

(三ウ6注)

波一流湍疾し。〔書入注・吐端

(三ウ6注)

反〕

(三ウ7注)

讎讎を

〔音甫〕

從り子に子に鶴

〔書入注・戸毒

反〕

(四才3)

白石鄰々たり

(四才5)

貌佼佼なる也

(四ウ5注)

薪芻の〔書入注・楚俱反〕

(五才7注)

其葉菁々たり

(六ウ7)

追迕〔書入注・側伯反〕

(八才6注)

則罷倦めり〔書入注・音皮〕

(八ウ1注)

弗鼓〔如字本或作擊非〕

有漆〔音七木名〕

封沃〔烏毒反邑名即曲沃〕

激揚〔經歷反〕

湍疾〔吐端反〕

讎〔音秀衆家申毛並依字下文同

鄭改爲宵〕

鶴〔戸毒反曲沃邑也〕

同〕

佼佼〔古卯反〕

薪芻〔楚俱反說文云芻刈草也象

苞束草之形〕

菁菁〔本又作菁同子零反毛葉盛

也鄭希少貌〕

追迕〔側伯反〕

罷倦〔音皮〕

三

一

これらは通志堂本毛詩釈文における増補と見るよりも、毛詩唐風平安中期点が利用した原初形毛詩釈文に掲載されていても何等かの理由で声点・点発が施されなかったと考えるのが穏当であろう。これは(C)類の中に經典釈文によったと考えられる書入れ音注が多数存することによって理解される。

ところで、この(A)(B)(C)各類の割合を本資料と古文尚書平安中期点とで比較するならば、古文尚書平安中期点における声点・点発よりも本資料の声点・点発が施された字句と經典釈文との関係が密であるように思われる。古文尚書平安中期点・毛詩唐風平安中期点の各々に書入れられた音注について通志堂本經典釈文と比較された沼本克明博士の比較表⁽¹⁾を見ても、本資料の方が通志堂本經典釈文に、より一致することが看取される。これは、古文尚書平安中期点と毛詩唐風平安中期点とで利用した經典釈文の素性が異なっていたためか、或いは同じ原初形經典釈文を利用していたとするならば、原初形經典釈文から宋刊本系の經典釈文への改変の様子が各釈文毎に異なっており、尚書釈文の改変に比して毛詩釈文の改変が少なかったためであるとも考えられるであろう。

三

本節では声点に注目して考察を加えることにする。經典釈文における注記のうち、声点と関係を有すると考えられるのは音注である。古文尚書平安中期点における声点も經典釈文の音注と関係を有した。本資料における声点の有無と經典釈文の音注の有無との対応関係を見ると次のようになる。

(A) 經典釈文に音注があり、声点があるもの

一三五例(八四・四%)

(B) 經典積文に音注がなく、声点があるもの

四例(二・五%)

(C) 經典積文に音注があり、声点がないもの

二一例(一三・一%)

以下(A)類の用例を掲げる。

- 1 晉の僖(平)公也 (一オ2)
- 2 不(平)中(志)礼に。 (一オ2)
- 3 自虞樂(平)心(心)せむことを也 (一オ3)
- 4 憂深(平)、思(志)遠、 (一オ4)
- 5 憂深(平)、思(志)遠 (一オ5注)
- 7 蟋(平)蟀(平)心(心) (一オ7)
- 8 歲聿(平)心(心)に〔書入注・允橋反〕 (一オ7)
- 9 其(平)春(志)クればむ。 (一オ7)
- 10 其(平)除(志)のうもむ(一ウ1)
- 11 蟋蟀(平)恭(上)也〔書入注・俱勇反〕 (一ウ1注)
- 12 除(志)去也 (一ウ1注)
- 13 可以(平)自樂(平)心(心)す (一ウ2注)
- 14 不(平)は自樂(平)心(心) (一ウ2注)
- 15 不(平)復(志)暇爲(志)せ之。

- 僖公〔許其反史記作釐侯〕
- 不中〔丁仲反〕
- 虞樂〔音洛下皆同〕
- 思遠〔息嗣反注同〕
- 4 二同ジ
- 蟋蟀〔上音悉下所律反蟋蟀恭也説文蟀作蟹〕入一オ2冒頭ニ対応
- 歲聿〔允橋反逐也〕
- 其莫〔音暮〕
- 其除〔直慮反去也注同〕
- 恭也〔俱勇反沈又九共反趨織也一名蜻蛉〕
- 10 二同ジ
- 3 二同ジ
- 3 二同ジ
- 不復〔扶又反〕

(一ウ2注)

16 復(志)命(平)て農夫(平)に (一ウ2注)

17 無(平)れ已(平)太(志)康(平)た(平)シ(志)こと。

18 職(平)として思(平)其(平)居(平)志。

19 康樂(平)心(心)也 (一ウ3注)

20 雖當(平)自樂(平)心(心)、 (一ウ4注)

21 無(平)れ甚(志)大樂(平)心(心)こと。

22 好(志)心(心)樂(平)心(心)を无(平)れ荒(志)なること (一ウ4注)

23 22 好(志)心(心)樂(平)心(心)を无(平)れ荒(志)なること (一ウ5)

24 良士(平)の懼(志)々(志)たる(平)カコト (一ウ5)

25 24 君(平)之(平)好(志)心(心)樂(平)心(心)を (一ウ5)

26 君(平)之(平)好(志)心(心)樂(平)心(心)を (一ウ6注)

27 26 今(平)我(平)不(平)は樂(平)心(心)反(反)ま (一ウ7)

28 今(平)我(平)不(平)は樂(平)心(心)反(反)ま (一ウ7)

29 好(志)心(心)樂(平)心(心)を (一ウ2)

30 好(志)心(心)樂(平)心(心)を (一ウ2)

31 良士(平)の厭(志)々(志)たる(平)カコトク(平)ガガ (書入注・俱衛反)

32 今(平)我(平)不(平)は樂(平)心(心)反(反)ま (一ウ2)

33 日月(平)其(平)愾(平)心(心)す(志)なる (書入注・吐刀反) (一ウ4)

15 二同ジ

大康〔音泰徐勅佐反下同〕

其居〔義如字協韻音據〕

3 二同ジ

3 二同ジ

3 二同ジ

3 二同ジ

好樂〔呼報反下同〕

3 二同ジ

懼懼〔俱具反顧禮義〕

22 二同ジ

3 二同ジ

3 二同ジ

22 二同ジ

3 二同ジ

厭厭〔俱衛反動而敏於事也〕

3 二同ジ

3 二同ジ

其愾〔吐刀反過也〕

34	好 <small>（志）</small> と樂 <small>（心）</small> 、 （二オ6）	22 二同ジ	考） （三オ2）
35		3 二同ジ	有扭 <small>（女久反）</small> 也 <small>（也）</small>
36	樂 <small>（心）</small> 道 <small>（心）</small> 之 <small>（心）</small> 也 <small>（二オ6注）</small>	3 二同ジ	53 隰 <small>（心）</small> 有 <small>（心）</small> 扭 <small>（心）</small> 〔書入注・女九反〕 （三オ2）
37	山有樞 <small>（心）</small> 〔書入注・本或作 藟鳥倭反〕 （二ウ1）	山有樞 <small>（本或作藟鳥倭反）</small> 也 <small>（也）</small>	54 扭 <small>（心）</small> 楛 <small>（心）</small> 也 （三オ2注）
38	以 <small>（心）</small> て自樂 <small>（心）</small> 、 有 <small>（心）</small> とも朝 <small>（心）</small> ・庭 <small>（心）</small> 去 <small>（心）</small> （二ウ3）	自樂 <small>（音洛下及注同）</small> 有朝 <small>（直遙反）</small> 廷 <small>（徒佞反）</small>	55 子有 <small>（心）</small> 庭 <small>（心）</small> 內 <small>（心）</small> 。 （三オ3）
39	不能 <small>（心）</small> ・酒 <small>（心）</small> ・掃 <small>（心）</small> 、 入注 <small>（心）</small> ・所 <small>（心）</small> 懶 <small>（心）</small> 反 <small>（心）</small> 、 （二ウ3）	酒 <small>（所懶反沈所寄反下同）</small> 埽 <small>（蘇報反本又作掃下同）</small>	56 酒 <small>（心）</small> ・灑 <small>（心）</small> 也 <small>（書入注・色蟹 反又所綺反）</small> （三オ4注）
40	弗 <small>（心）</small> ・曳 <small>（心）</small> 〔書入注・以世反〕 （二ウ7）	弗曳 <small>（以世反）</small>	57 琴瑟不 <small>（心）</small> 離 <small>（心）</small> 、 且 <small>（心）</small> 、以 <small>（心）</small> て喜樂 <small>（心）</small> 、 （三オ6注）
41	弗 <small>（心）</small> ・斐 <small>（心）</small> 〔書入注・力俱反〕 （二ウ7）	弗斐 <small>（力俱反斐亦曳也馬云牽也）</small>	58 且 <small>（心）</small> 、以 <small>（心）</small> て喜樂 <small>（心）</small> 、 （三オ6）
42	斐 <small>（心）</small> ・亦 <small>（心）</small> ・曳 <small>（心）</small> 也 （二ウ7）	46 二同ジ	59 白石鑿 <small>（心）</small> ・心 <small>（心）</small> たり 子洛反 <small>（心）</small> 、 （三ウ5）
43	樞 <small>（心）</small> ・莖 <small>（心）</small> 也 <small>（書入注・田節 反沈又直梨反）</small> （二ウ6注）	37 二同ジ	60 洗 <small>（心）</small> ・去 <small>（心）</small> ・垢 <small>（心）</small> ・濁 <small>（心）</small> 、 入注 <small>（心）</small> ・蘇 <small>（心）</small> ・禮 <small>（心）</small> 反 <small>（心）</small> 又蘇 <small>（心）</small> ・典 <small>（心）</small> 反 <small>（心）</small> 、 （三ウ6注）
44	弗 <small>（心）</small> ・曳 <small>（心）</small> 〔書入注・以世反〕 （二ウ7）	弗曳 <small>（以世反）</small>	61 除 <small>（心）</small> の <small>（心）</small> つ <small>（心）</small> きて民 <small>（心）</small> の所 <small>（心）</small> を、惡 <small>（心）</small> 、 （三ウ6注）
45	弗 <small>（心）</small> ・斐 <small>（心）</small> 〔書入注・力俱反〕 （二ウ7）	45 二同ジ	62 素衣朱 <small>（心）</small> ・心 <small>（心）</small> して〔書入注・音 博〕 （三ウ7）
46	斐 <small>（心）</small> ・亦 <small>（心）</small> ・曳 <small>（心）</small> 也 （二ウ7）	46 二同ジ	63 繡 <small>（心）</small> ・心 <small>（心）</small> は當 <small>（心）</small> 爲 <small>（心）</small> 宵 <small>（心）</small> 、 （四オ1注）
47	宛 <small>（心）</small> として其死 <small>（心）</small> なむ矣 <small>（心）</small> 〔書入注 於阮反〕 （三オ1）	宛 <small>（於阮反本亦作宛死貌）</small>	64 丹朱 <small>（心）</small> を爲 <small>（心）</small> す・純 <small>（心）</small> 也 <small>（心）</small> （四オ1注）
48	他人是れ愉 <small>（心）</small> 、 毛 <small>（心）</small> 以 <small>（心）</small> 朱 <small>（心）</small> 反 <small>（心）</small> 鄭 <small>（心）</small> 作愉 <small>（心）</small> 他 <small>（心）</small> 候 <small>（心）</small> 反 <small>（心）</small> 、 （三オ1）	是愉 <small>（毛以朱反樂也鄭作愉他候反取也）</small>	65 云 <small>（心）</small> に何 <small>（心）</small> なそむ樂 <small>（心）</small> 、 （四オ1注）
49	愉 <small>（心）</small> ・樂 <small>（心）</small> 也 （三オ2注）	50 二同ジ	66 不樂 <small>（音洛）</small>
50	山 <small>（心）</small> に有 <small>（心）</small> ・樛 <small>（心）</small> 、 〔書入注・音 有樛 <small>（音考山樛）</small> 〕	有樛 <small>（音考山樛）</small>	67 不樂 <small>（音洛）</small>
51	山 <small>（心）</small> に有 <small>（心）</small> ・樛 <small>（心）</small> 、 〔書入注・音 有樛 <small>（音考山樛）</small> 〕	有樛 <small>（音考山樛）</small>	68 不樂 <small>（音洛）</small>
52	好 <small>（志）</small> と樂 <small>（心）</small> 、 （二オ6）	22 二同ジ	考） （三オ2）

69 白石・皓(まじり)〔書入注・古老友〕(四才2)
 70 清徹(心)之也(具)〔四才5注〕
 71 蕃(心)・衍(心)〔書入注・音煩〕(四ウ2)
 72 入注・音煩(心)〔書入注・音煩〕(四ウ2)
 73 蕃(心)・衍(心)〔書入注・音煩〕(四ウ2)
 74 一椀(手)之實〔四ウ3注〕(四ウ3)
 75 一椀(手)之實〔四ウ3注〕(四ウ3)
 76 々(朋)・比(心)也〔四ウ5注〕
 77 椒聊且(心)〔書入注・子餘反下同〕(四ウ6)
 78 遠條且(心)〔書入注・子餘反下同〕(四ウ6)
 79 蕃(心)・衍(心)〔書入注・本又作掬九六反〕(四ウ7)
 80 兩の手を曰菊(心)〔四ウ7注〕(四ウ7)
 81 綱(心)・繆(心)〔書入注・上直留反・忘侯反〕(五才4)
 82 三星は參(心)也〔書入注・所金反〕(五才6注)
 85 謂始て・見(心)を東方に。

皓皓〔古老反潔白也〕
 澈也〔直列反或作徹誤〕
 其蕃〔音煩〕
 衍〔延善反〕
 71 二同ジ
 72 二同ジ
 一椀〔音求又其菊反或音掬沈居局反〕
 朋比〔王肅孫毓申毛必履反謂無比例也一音必二反鄭云不朋黨則申毛作毗至反〕
 聊且〔子餘反下同〕
 77 二同ジ
 72 二同ジ
 菊〔本又作掬九六反兩手曰菊〕
 80 二同ジ
 綱繆〔上直留反下亡侯反綱繆猶纏繆也〕
 參也〔所金反〕
 始見〔賢遍反下不見見於東同〕

86 爲たり二月之合・宿(心)。〔五才6注〕(五ウ1注)
 87 火星不(心)は・見(心)。〔五才1注〕(五ウ1注)
 88 見(心)於東方矣〔五ウ2注〕(五ウ2注)
 89 後(心)たり陰陽交會之月(心)。〔五ウ5注〕(五ウ5注)
 90 見(心)此の解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 91 解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 92 解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 93 解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 94 解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 95 解(心)。觀(心)。〔五ウ7注〕(五ウ7注)
 96 此の解(心)。觀(心)。〔六才1注〕(六才1注)
 97 正月の中(心)に直(心)。〔六才2注〕(六才2注)
 98 見(心)此の解(心)。觀(心)。〔六才3注〕(六才3注)
 99 注・采旦反(心)。〔六才3注〕(六才3注)
 100 杖(心)杜は刺時也〔書入注・徒細反〕(六才6)
 101 所(心)ラレムト。并(心)。〔書入注・徒細反〕(六才6)

合宿〔音秀〕
 85 二同ジ
 85 二同ジ
 後陰〔戸豆反〕
 85 二同ジ
 解〔音悅〕
 90 二同ジ
 91 二同ジ
 90 二同ジ
 91 二同ジ
 直戸〔音值又如字〕
 察者〔采旦反三女爲察字林作察〕
 杖杜〔徒細反特貌本或作夷狄字非也下篇同杜赤棠木〕
 所并〔必政反〕

132 父母何な(こ)か、怙(こ)か(七オウ)
何怙〔音戸恃也〕

131 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

130 肅々(こ)も鳩行(こ)〔書入注・戸
反〕

129 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

128 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

127 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

126 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

125 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

124 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

123 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

122 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

121 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

120 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

119 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

118 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

117 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

116 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

115 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

114 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

113 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

112 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

111 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

110 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

109 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

108 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

107 行(こ)翻(心)也〔書入注・戸
反〕

この調査結果より、本資料における声点は大旨經典積文に音注が
存する漢字に施されたものであると考えられるのである。但し、經
典積文に音注を有する漢字の総てに差声された訳ではなく、經典積
文に音注が存しても声点が施されないことがあるということが(C)
類によって知られる。しかし、それは全体の一割程度の少数である。
沼本克明博士は本資料の声点を調査され、本資料の声調体系につ
いて論ぜられた。その御説と本資料の声点が經典積文に音注を有す
る漢字に施されたものであるということがどういふ関係になるのか
という点について考えてみたい。少々長くなるが博士の御著書より
引用する。

右(声点の位置別に用例を掲げた表・引用者)を改めて広韻と
の比較表にして示してみると上のようになる(表省略・引用者)。

この表によって本資料の声調体系が、A―平声、B―上声、C―
去声、D―入声の四声調を区別する四声体系で加えられたもので
あることが明らかである。そしてそれが、切韻系の声調体系とは
ぼそのまま正しく対応していることが明らかである。

広韻に対する異例が六例存するが、この中「居(広韻平声)」、
の去声、「裾(広韻平声)」の去声は、明らかに、音説の典拠とさ
れた「經典積文」の音注によったものである。すなわち、經典積
文には「其居其居反」と有り、「拋」は広韻去声であり、「豹裾豹裾反」
と有り、「居」は広韻平声、「拋」は広韻去声である。この
二例共に、本文では「三居・二」「三裾・二」の如く数字「一」
「二」と共に書き加えられている。この数字は、「先後の注記」
と同じものであり、要するにこの二声調が訓詁において認め得る
ことを示したと解釈される。その際に、広韻と同じ平声が優先さ
れ、經典積文に有る去声が次善の説として認められていたと考
える事ができる。

「純(広韻平・上声)」の去声、「政(広韻去声)」の平声もまた、
經典積文によるものと思われる。經典積文には「爲純其純反」と
有り「允」は広韻上声、「順」は広韻去声であり、「政役政役反」と
有り「征」は広韻平声であるから、この音注から、広韻に存在し
ない去声および平声は出て来る可能性があるのである。

「多(広韻平声)」の上声、「茲(広韻平声)」の去声はその出
現の理由を詳らかにしない。

以上によって、

(1)毛詩平安中期点は四声体系であること。

(2)切韻系韻書の声調に対して若干のずれが見られるが、これは、

日本漢音の祖系音と切韻音とのずれ(「多」「茲」の如きものを考える)という問題の他に、「經典釈文」の音注による人為的音(知識音)が導入されたためであること

(3)日本漢音の声調体系として主流であった六声体系では、大旨上声全濁字は去声に移行していたと見なされるが、四声体系ではかような現象はなく、上声全濁字(垢・解・杼・怙)は切韻系のままに上声を保っていることが指摘できる。

右の引用の中で沼本博士が例外として取扱われた「多」「茲」はそれぞれ、

○今其子孫衆多(ト)して也(ト)

○子兮(ト)者是嗟茲(ト)也

のように前者はラコト点「に」、後者はラコト点「を」と読むべきかと思われる。つまり、前者は「也」字左下の返点兼用のラコト点「て」を生かし「に(シ)て」の読みとなり、後者は「茲」字右傍の角筆仮名「レ」が見えることから朱点でも「(コレ)を」と読むのが穩当であろう。とすれば例外であった二例が処理でき、結論(2)の中で述べられた、日本漢音の祖系音と切韻音とのずれという問題は解消されて博士の御説が鮮明になってくる。

ところで、先に述べたように本資料における声点が大旨經典釈文に音注を有する漢字に施されたとするならば、本資料は經典釈文の音注に即して、切韻系韻書の四声体系をもって差声されたものではないかと考えられるのである。すなわち、博士の結論(2)のように、切韻系韻書と声調の異なる声点を施されたものに対して、部分的に經典釈文の音注による人為的音が導入されたとは解釈できないように

思われる。經典釈文の音注を広韻によって換すると、そこから導き出される声調は総て本資料の声点が示す声調と一致するのである。

更に、古文尚書平安中期点の声点も經典釈文の音注に即して差点されたことを考え合せると、經典釈文という同一の註釈書の音注に即していながらも、一方は五声体系、一方は四声体系という異なった声調体系で差声されたということが考えられるであろう。

さて、本資料には朱筆の仮名・ラコト点・声点の他に角筆による仮名・ラコト点と斜線「\」の形で声点が書入れられている。次にこの角筆の声点について少々見ておきたい。

小林芳規先生に御貸与頂いた移点資料によって確認できる角筆の声点は次の十五例である(印刷の都合上声点は・であらわす)。

- ◎・掃(ま)ハ(ラウ) (二ウ3)
- ◎財・貨(ま) (二ウ6注)
- ◎愉樂・心(ま)也 (三オ2)
- ◎芬(ま)香 (四ウ3注)
- ◎無崩(朋)・(ま) (四ウ5)
- ◎廣博(心)なる (四ウ6注)
- ◎綢(ま)繆(心) (五オ4)
- ◎纏(心)綿也 (五オ6注)
- ◎・祭(ま)者 (六オ3)
- ◎・比(ま)・輔(ま)也 (六ウ5注)
- ◎・比(ま)・輔(ま)也 (六ウ5注)
- ◎・困(ま)苦 (七ウ2注)
- ◎・究(ま)々 (七ウ4)
- ◎哀猶祛(ま)也 (七ウ4注)

◎孝侯鄂・心候也 (八オ3注)

この他に石塚氏によると次掲の十六例が存するようである。⁽¹⁶⁾

◎不樂・心 (二オ4)

◎自樂・心 (二ウ3)

◎有・栲 (三オ2)

◎有・杻 (三オ2)

◎洗去・垢 (三ウ6注)

◎繡 (三ウ7注)

◎朱繡 (四オ3)

◎蕃 (四ウ2)

◎椒 (四ウ3注)

◎飲 (六ウ6注)

◎聲 (七オ1)

◎悻 (七ウ2注)

◎君子・下 (八オ2)

◎龍 (八ウ1注)

◎行翻 (八ウ5注)

このうち存疑とした「杻」字は石塚氏の釈文では上声の位置に斜線があり(去)と注されたものである。恐らく誤植であり、上声が正しいのであろう。又、「垢」字の去声については去声の位置に斜線のみ存する。今はこれを去声点と見做すこととする。

これら角筆の声点が施された漢字が経典釈文に音注とともに記載されているか否かを調べると、右掲◎を施した二十二例が経典釈文に記載されており、○を施した九例は経典釈文に記載されないこと

がわかる。数から言えば角筆の声点も経典釈文の音注に拠ったとも考えられようが、経典釈文に記載されない九例は朱声点の場合より多く、問題が残る。

声調それ自体を見ると、「栲(角筆去声)」「繡(角筆平声)」「垢(角筆去声)」の問題となる例がある。「栲」は朱声点が上声に加点されており、「繡」は朱声点で他の箇所去声点に加点されている。朱声点加点の例があるので、これらは切韻系の声調とずれることになる。又、「垢」は上声全濁字であるが、朱声点では切韻系のまま上声であるのに対し、角筆点では去声である。このような所から考えると、経典釈文の音注に即して機械的に切韻系の四声体系で差声した朱声点とは性格を異にしていると思われる。しかし、原本について調査していない今、断言することはできない。

四

本節では点発について検討する。本資料の点発は古文尚書平安中期点における点発が双点・三点であるのに対し、単点であるという形態上の差異は認められるが、その機能は古文尚書平安中期点と同様、経典釈文における本文の異同を含む字体注を示すのではないかと予想される。

本資料における点発の有無と経典釈文の注記中の本文の異同を含む字体注(以下字体注と略称する)の有無とを調査すると次のようになる。

(A) 経典釈文に字体注があり、点発があるもの

八例(三六・四%)

(B) 經典積文に字体注がなく、点発があるもの

一例 (四・五%)

(C) 經典積文に字体注があり、点発がないもの

一三例 (五九・一%)

これによると、經典積文に字体注が存しても点発が施されない(C)類の数が多いことがわかる。もし、本資料における点発が經典積文の字体注と関係を有するのであれば、例外的な(B)類を除いて

(A)類と(C)類との間に、点発施点における何等かの原則が存するのであるか。或いは、単に点発を施す場合と施さない場合があるだけで、そこには何の原則もなかったであろうか(声点の場合は今のところ原則が見出せない)。次にこの点について検討してみることとする。

本資料において点発が施された漢字字体と經典積文の大字で掲出された被注字字体、注記中字体との関係を分類すると次のようになる。

▲第一類▼

○毛詩本文字体と經典積文被注字字体とが一致。

○毛詩本文字体と經典積文注記中字体とが不一致。

▲第二類▼

○毛詩本文字体と經典積文被注字字体とが不一致。

○毛詩本文字体と經典積文注記中字体とが一致。

▲第三類▼

○毛詩本文字体と經典積文被注字字体とが不一致。

○毛詩本文字体と經典積文注記中字体とが不一致。

古文尚書平安中期点における点発を調査した時には、右のような尚

書本文字体と經典積文の被注字字体・注記中字体との関係と、点発が施されるか否かとの間に明確な関連性を指摘することはできなかった。しかし、毛詩唐風平安中期点の場合には、点発が施されるか否かという(A)類と(C)類の間に、この字体の関係を介在するように思われる。以下に(A)と(C)の各類を第一と第三類に分類して掲げる。

(A)類

○第一類(二例)

晉・僖公也 (一オ2) 僖公〔許其反史記作釐侯〕

○第二類(五例)

不能・酒ま・掃ま (二ウ3) 埽〔蘇報反本又作掃下同〕

清徹心之也 (四オ5注) 澈也〔直列反或作徹誤〕

獨行て亮りたり。 (七オ1) 爨炎〔本亦作煑又作爨求營反無所依也〕

不こと恤其民也 (七オ5) 不卹〔本亦作恤荀律反憂也〕

見みる此の解き。觀まきを (五ウ7) 邈〔本亦作解戶懈反一音戸佳反〕

○第三類(二例)

晉の照公也 (二ウ1) 昭公〔左傳及史記作昭侯〕

盈菊上に (四ウ7) 躬〔本又作拘九六反兩手曰躬〕

(B)類

正月の中に直心戸に也 (六オ2) 直戸〔音直又如字〕

〔C類〕

○第Ⅰ類（九例）

蟋^ハ・心^ハ・蟀^ハ（一オ7）

山有樞^{（平）}（二ウ1）

他人是れ愉^{（平）}（三オ1）

當爲宵^{（平）}（四オ1注）

見^ル此^ノ・解^{（去）}・觀^{（去）}（五ウ7）

見^ル此^ノ・祭^{（去）}者^{（去）}（六オ3）

・杖^{（去）}杜^{（去）}は刺時^{（去）}を也（六オ6）

弗鼓弗考（六オ4）

其葉菁^{（去）}々^{（去）}たり（六ウ4）

○第Ⅲ類（四例）

・苑^{（去）}として其死^{（去）}なほ矣

白石鄰^{（去）}々^{（去）}たり（三オ1）

羔裘豹^{（去）}の・衷^{（去）}（七ウ4）

苞^{（去）}・損^{（去）}也（八オ4注）

〔下欄・楨・之忍反〕

蟋蟀〔上音悉下所律反蟋蟀恭也
說文蟀作蝓〕

山有樞〔本或作崑烏侯反莖也〕

是愉〔毛以朱反樂也鄭作偷他侯
反取也〕

爲宵〔音綱本亦作緇〕

觀〔本又作迥同胡豆反一音戸
反遼觀解說也韓詩云遼觀不固
之貌〕

祭者〔采旦反三女爲祭字林作
祭〕

杖杜〔徒細反特貌本或作夷狄字
非也下篇同杜亦棠木〕

弗鼓〔如字本或作擊非〕

菁菁〔本又作菁同子零反毛葉盛
也鄭希少貌〕

苑〔於阮反本亦作苑死貌〕

鄰鄰〔刊新反清敵也本又作隣同〕

豹頭〔徐救反本又作𤝵同〕

沈音田又音振廣雅云概也〕

〔A〕類では毛詩本文の字体と經典積文の被注字字体とが一致し、注記中字体と一致しない第Ⅰ類が一例であるのに対して、その逆の第Ⅱ類が五例と多くなっている。ところが〔C〕類では毛詩本文字体と經典積文被注字字体が不一致であり、注記中字体と一致する第Ⅱ類に用例が見られず、第Ⅰ類には九例と多い。第Ⅲ類の例も各々二例・四例と存するが、用例数の上から見ると、〔A〕類では第Ⅱ類に、〔B〕類では第Ⅰ類に用例が多いのである。

このことより、毛詩唐風平安中期点における点発は、古文尚書平安中期点の場合と同じく、經典積文における字体注と密接な關係を有していると考えられるのである。更に、全体の用例数が少ないため断言することはできないが、毛詩唐風平安中期点における点発は、毛詩本文字体が經典積文の大字で掲出される被注字字体と異なり、注記中の字体と一致する第Ⅱ類のような場合に施され、毛詩本文字体が經典積文の被注字字体と一致して、注記中字体と異なる第Ⅰ類のような場合には施されないという傾向を見出し得るようになる。

五

以上、毛詩唐風平安中期点における声点・点発について經典積文との關係を述べてきた。古文尚書平安中期点における經典積文の利用の一端が声点・点発に認められるのと同じく、毛詩唐風平安中期点においても經典積文の利用の一端が声点・点発に認められるのである。

平安中期の漢籍訓点資料は多くを残しておらず、あくまで推測の域を出ないが、古文尚書平安中期点・毛詩唐風平安中期点において

このような点発の如き符号が使用されていることと、漢書楊雄伝天曆二年点・世説新書卷第六平安中期点、また、角筆点⁽¹⁸⁾ではあるが石山寺藏漢書高帝紀下平安中期点には点発の例が見られないことを考え合わせるならば、点発の如き機能を有する符号は、平安中期明經道の学問の場において用いられていたのではあるまいかとの想像もされるのである。

注

- (1) 新見保秀「我国古伝論語諸古写本に書入られた論語釈文の性格と価値」(日本中国学会報第九集、昭和三十二年十月)。同「我国論語諸古写本に書入られた「論語釈文」中の「一本」と「摺本」について」(斯文第二十三号、昭和三十四年一月)。同「我国古伝論語古写本に書入られた論語釈文の音韻学的性格と価値」(斯文第二十八号、昭和三十五年十月)。沼本克明「古文尚書平安中期点の字音注記の典拠について」(国語学第七十八集、昭和四十四年九月)、『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』に再録)。同「中原本論語卷第四・八に引用された論語釈文の性格と論語訓読に於る影響について」(高山寺古訓点資料第一)所収、昭和五十五年二月、東京大学出版会)。
- (2) 松本光隆「漢書楊雄伝天曆二年点における訓読の方法」(国語学第百二十八集、昭和五十七年三月)。
- (3) 拙稿「古文尚書平安中期点における朱声点・点発について」(広島大学文学部紀要第四十六卷、昭和六十二年一月)。
- (4) 「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」(東洋文庫書報第十五号、昭和五十九年三月)。

(5) 京都帝国大学文学部景印旧鈔本第一集所収。以下、本稿ではこの複製本に基いて、小林芳規先生に御貸与頂いた移点本に従って考察を進める。なお石塚晴通氏が注(4)文献において釈文を發表せられている。これをも参考にさせて頂く。

(6) 小林芳規『平安^{時代}に於ける漢籍訓読の国語史的研究』六九七・六九八頁参照。石塚晴通氏の注(4)文献の帰納図とは少異がある。

(7) 挙例において、ヲコト点を平仮名で、仮名を片仮名であらわし、所在は複製本の丁数・オウ(表裏)・行数で示す。以下同じ。

(8) 「中」字には去声点と認められる大ぶりの星点の他に、ヲコト点「を」かと思われる星点があるが未詳である。石塚氏注(4)文献ではこれも去声点とされ、去声点二つが差されていると判断されている。

(9) 經典釈文注記中には次掲のような「下皆同」「注同」の如きものがある。

○廣樂〔音洛下皆同〕
○思遠〔息嗣反注同〕

これは本文中で各々、

○自虞樂・(心)せむことを也 (一オ3)

○憂深、思(心)遠、(一オ4)

に対応するが、注記によって「樂」字に対する音注「音洛」は以下の、

○可以て自樂・(心)す矣 (一ウ2注)

○不是自樂・(心)也 (一ウ2注)

○康樂・(心)也 (一ウ3注)

○雖當自樂・(心) (一ウ4注)
等の「樂」字にも及んでおり、「思」字に対する音注「息嗣反」
は以下の、

○憂深・思(ま)遠 (一オ5注)

の「思」字にも及んでいる。このような例は総て毛詩唐風平安
中期点に声点があり、經典積文に掲載される例として処理する。

(10) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(昭
和五十七年三月、武蔵野書院) 六三五・六三六頁の表による。

(11) 注(10) 文献、六一一〜六一八頁、六三五・六三六頁。

(12) 注(10) 文献、九六一・九六二頁。

(13) 經典積文に声調の異なる複数の音注がある場合には、そのいづ
れかと声点の示す声調が一致する。

(14) 注(6) 文献、六九六〜七〇一頁には本資料の角筆点について
詳しく述べられている。

(15) 注(4) 文献。

(16) 石塚氏は脚注において「垢」、右ノ角筆点未詳。とされている。
この去声の位置の角筆点を言われているのかもしれない。

(17) 京都帝国大学文学部景印旧鈔本第二集所収複製本に拠る。原本
について調査された報告として最近のものに、石塚晴通・小助
川貞次氏「上野本漢書楊雄伝訓点の問題点」(第五十二回訓点
語学会、昭和六十年五月)がある。

(18) 書跡名品叢刊第一七六回配本(二女社)「唐鈔本・世説新書」
に拠り、小林芳規先生に御貸与頂いた移点本を参考とした。

(19) 小林芳規先生・松本光隆氏に御貸与頂いた移点本に拠る。